



## 「逃げないで」

人間環境学部 1年  
大塚朱莉

あ、空気が違う

2018年3月下旬、大学見学を兼ねて東京に降り立った時そう思ったのを昨日のように覚えています。歩くスピードの速い人々、物価の高いおしゃれなお店、満員電車。私が生まれ育った福島県とは何もかもが違って、その違和感は「空気が違う」という言葉に置き換えられました。大学入学後もその違和感は消えませんでした。大学の講義中に大きな声で私語を話し続ける生徒、授業をさぼり続ける生徒、特に注意しない先生(すべて一例)を見てカルチャーショックのようなものを受けました。しかし数か月後、そのような風景を見ても何も感じない自分が居ました。

人間は空気がなければ生きていけません。生身の人間が宇宙空間に放り込まれたら血液は沸騰して体は破裂し木端微塵になるという都市伝説もあります。溺死が1番辛い死に方だという意見も聞いたことがあります。大学受験の時、入学したばかりの時、私は少し臍抜けたような気怠く感じる重くてドロドロしたこの空気で窒息しそうでした。なのに、今は凄く息がしやすいのです。ただ流されるままに毎日を使い捨てているこの時間はとても楽で、心地よくて、幸せです。けれど同時にそれは、とても恐ろしいことなのだと思います。空気に馴染めば馴染むほど知らないうちに感染して、自分が周りの人にウイルスをまき散らしているのかもしれないからです。1度感染してしまったら、きっと治療法はただ1つです。最後は自分自身が律するしかないのです。治療をどんどん後伸ばしにすればするほど苦しくなるのは目に見えています。空気に流されず、自分自身の力で道を切り開き続けることはとても苦しくて辛いことだけれど、逃げ続けていたら必ず私は駄目になる。心の奥では気づいていたのに、私は目を逸らし続けていました。

意図せず知った学生の声を発表するこのコンクールのキーワード「空気」を見たとき、凄くドキッとしました。4月から大学に通い現在8月、今このタイミングで自分の中のウイルスを自覚することが出来て本当に良かったと思います。これから先の人生、きっと色々なことが起こります。どんなに苦しくても、逃げずに自分を持ち続けていこうと思います。もがきながら必死になって終えた大学受験。第1志望には落ちて泣いた日もあったけれど、振り返ってみたら凄く清々しかったです。あの時の自分が見ても恥ずかしくない、がっかりしない大学生活を送りたいと思います。



## 「対価」

社会学部 4年  
大西柚葉

「毎週全員、飲み会に参加することで」

がらんとした学生ホール。就職活動を目前に控えた十一人の学生たちは、一つのルールを作った。毎週、面接練習をOBにしてもらう代わりに、彼らを接待しようというのだ。

合意の雰囲気は流れる。だが、毎週三千元、二次会も行けば五千元。一月で最大二万円もの出費を承諾することなど、バイト代を生活費で使い切ってしまう私にはできなかった。

「できるだけ出したいけど、毎週は無理」

一人の女生の、凍った瞳がきつく歪んだ。

「せめて飲み会を開くことが、報酬も出せない私たちが示せる誠意なんじゃないの?」

それは反対意見ではなく、「空気を読めない」ことに対する非難であった。

空気を読むこと。和を貴ぶこと。和のためなら生活費でさえ惜しまぬこと。集団に属し、教を乞うことは、それらができぬ人間にとって過ぎた贅沢なのだろうか。

十二月の曇天に、苦々しさを思った。



## 「Improve the atmosphere」

経済学部 1年  
井手健太

人は誰でも、八割弱の窒素と二割強の酸素、その他諸々の気体を吸って生きている。大学でも学生はみな同じ空気を吸い、同じように授業を受ける。しかし、同じ空気を吸っているにもかかわらず、内面から吐き出すものは一人ひとり異なる。そのため、その場にいる人間によって、空気は変わる。一人ひとり持つ性格や過去の思い出・成功体験・失敗経験などによる、その人しかもっていない価値観や感受性が、周囲の空気を変える要素となる。

では、どうすれば空気を変えることができるのだろうか。近年、大学の授業で教員と生徒の双方向的対話を重視する、アクティブラーニングが増えている。私はゼミなどの少人数での授業や、オープンキャンパスのトークショーなどで、人前に立つ機会がとても多い。そんな中、気づいたことがある。それは、まったく同じプレゼンをして、話し方によって空気が変わるということである。先日、私は大学の活動で同じ内容のプレゼンを二つの集団に向けて行った。一つ目の集団へのプレゼンは、その日伝えるべきことを伝えるだけに留まった。プレゼンをした感想として、話すべきことは話したのにもかかわらず、プレゼン中に「空気の重さ」や「やりにくさ」を感じた。この反省を踏まえ、二度目のプレゼンでは自分の体験談や余談を盛り込むようにし、「自分にしかできないようなプレゼン」をした。すると、一回目の時とは全く比べ物にならない違いがあった。数回観客から笑いが起きた。質問も多く出てきた。和気あいあいとした空気になった。この違いは何なのだろうか。

この違いを生んだ要因は「個性」であると感じた。自分がプレゼンの中で個性を出すことができたため、周りもそれを受け止めようとしてくれたように感じる。誰からでも聞ける話ではなく、その人からしか聞けない話に価値があるのだ。

近い将来AIが台頭し、人間の仕事はなくなるといわれている。そんな中、人間はどのような武器で立ち向かっていけばいいのだろうか。英語力か、計算力か、プログラミング力か。いや、精度も速度も人間が劣る。では、人間に残された武器、それは「余談力」である。余談で自分の個性を表したうえで、自分の意見や関心を空気中に解き放つこと。そのことによって聞き手側の意欲や関心を掻き立てることができる。空間の空気を好転させることができる。

地球温暖化や都市開発が原因で、生物多様性が失われているというニュースをよく耳にするが、最も多様性を失っているのは私たち人間ではないだろうか。個性とはすなわち多様性を意味する。皆がスマホにとらめっこし、利益や成果を追求する。無駄なことを排除し、効率ばかりを求めている。しかし、私たちが排除している趣味や無駄なことこそ、一見役に立たなそうで一番の武器になるのだ。個性の埋没は空気を重くする。同調圧力によって気圧が増す。ただ聞いたことを覚えるばかりの授業では、画一化されていくだけである。マジョリティに合わせなければならないような風潮を乗り越え、自分の意見をぶつけてみる、発言をする。そのような機会がある授業を増やしていくべきだと思う。

私たちは、金太郎顔になってはならないのだ。



## 「みんなの中の『私』」

人間環境学部 4年  
鈴木佑理

「やりたいことがあるなら、心配しないでどんどんやってみなさい。  
行ってみたいところがあるならどんどん行ってみなさい。」

私は、何か選択に迷うたび両親がかけてくれたこの言葉を思い出して、次の一歩を決める。

大学に進学してまちづくりを学び、地域やそこに暮らす人を元気にすることが私の夢だった。4年間の学生生活で、大都市や豪雪地帯、中山間地域などに足を運び、あらゆる地域の政策や人の暮らしに触れ、現地の方の生の声を聞いてきた。すると、持続可能性が高い地域に共通する2つのことが見えてきた。それは、「このまちが好きだ」という住民や地域外の人が多いことと、その気持ちを地域に還元すべく「地域らしさを守りながら、自分にできる新たなことに挑戦し、常に地域が進化していること」である。つまり、地域に愛着を持ち、その好きな部分を他の人と共有して何か新しいコトを起こしている地域こそ、いきいきしているということだ。

私はこれに気付くと同時に、ふと「私らしさ」というものが気になり始めた。いくつもの地域がある中で、「地域らしさ」を育てている地域は人を惹きつける。自然や文化、観光資源を光らせる人がいる地域は活気があふれるし、決して埋もれていない。では、私は周りに流されずにいるのだろうか。どれほど自分を理解できているか、負の感情を基準に行動を決めていないか。「間違えたら「恥ずかしい」「みんなと違う意見を言うのは怖い」「失敗したら「情けない」」それなら、やらない。そんな理由で進める道を減らすのは、もったいない。

だから、これからは「地域らしさ」があるように「私らしさ」の軸を見つけてもっと自由に、凛として生きていきたいと思う。やってみたいことをやる、行きたいところがあれば行く、必要だと思うことに取り組む。一つひとつ大事な選択をする時には、周りの目や意見から身を守らず、自分の本音を信じて新しい道に足を踏み出してみる。

そして、挑戦して様々な感情と向き合いながら、深く堂々と生きていきたい。

みんなの中のひとりとして埋もれないように、丁寧に「私」を紡いで生きていきたい。

## F/D川柳受賞者発表

### F/D川柳大賞

皆勤賞 名もわからない 友でできる

### 佳作

単位とは もらうのでなく 取るものだ Sの原

「問い」をもち 調べて探求 導く「解」 夏疾風

ああ尊い 学び放題 (法大) 大学生 えこびよん大好きマッチョ

四年間 学んだ卯の レジメたち えこびよん大好きマッチョ

どうでもいい そんな授業は どこにもない とまと

総長の 講義も一度 受けたいな 伊島尚純

忘れない 思い出詰まった 55・58 (三ツツツ) 一ノ瀬由梨

皆んなそう 不安抱えて さくら咲く 関山大輝

### 入賞

学生が 求めるものは 少数 伊島尚純

窓口も 教育現場 しっかりと 理系いいぞ

最前列 初めて知った 教授の顔 一ノ瀬由梨

落ちていく 視力とやる気と GPA 冷やレトマト

多様性 学ぶ人環 多種多様 ショーゴ

祝日の 1限登校 やる気出る ショーゴ

自主性の 集うキャンパス 我が母校 山口真人

他学部と 共に集いし 学び舎に 山口真人

想い持ち 踏み出した人 成功者 関山大輝

君の声 僕を助ける 新学期 関山大輝

助け合い 不安なくなる 思いやり 関山大輝

新しい 元号迎える 新校舎 堀内剛

開始時間 覚えられない 100分授業 もりぞう